



社会教育

アドバイザー通信

第 1 号

平成28年 7月26日
発行 秋田県教育委員会
編集 南教育事務所

秋田県には4名の社会教育アドバイザーが配置されており、要請に応じてあきた県庁出前講座を行ったり市町村訪問に同行したりしながら、管内の家庭教育や生涯学習に関わる支援を行っています。第1号は、南管内での取組を紹介いたします。

学校・家庭・地域連携総合推進事業よ



5/31 「県南地区コーディネーター研修会」

会場：浅舞公民館

初めに、南教育事務所 藤原 秀一社会教育主事が、「コーディネーターに期待する3つのこと」と題して講義を行いました。「コーディネーターは、ゆるやかなネットワークでつながり、地域人材も共有したい。仲間を増やして一緒に活動することで後継者が育つ。コーディネーターとしての資質能力を高めるためには、研修に積極的に参加することが大事である。」という内容に、各コーディネーターは真剣に耳を傾け、メモをとっていました。

講義後は2つのグループに分かれて、コーディネーターカードの作成や活動プログラムの開発を班ごとに演習しました。



6/23 「県南地区 第1回スキルアップ研修会」

会場：浅舞公民館

前半は、「子どもや保護者との関わり方」という演題で、大仙市角間川公民館 枝川 宏子館長から講話いただきました。子どもたちへの声かけや保護者への対応等、小学校現場での経験を基にしたタイムリーな内容は、参加者の心を捉えていました。「叱られることの多い子どもには、見通しをもったプログラムで対応し、成功体験を感じさせてほしい。」と参加者に呼びかける言葉はとても印象的でした。

後半は、5つのコース(工作・横手ダーツ・キッズダンス・音楽遊び・室内遊び)に分かれて実技研修を行いました。参加者は、今後の活動プログラムの参考にしようとそれぞれの実技に意欲的に取り組んでいました。



講話の最後に紹介されたのは、「コーディネーター次第で活動が変わる」という東山田コミュニティハウス館長 竹原 和泉氏の言葉です。各コーディネーターが資質能力を更に高めていくことができるよう、今後も研修内容を充実させ、参加者のニーズに応えていきたいと思いました。

我が子をかわいいと思うのは親であればみな同じです。保護者との関わりで悩んでいる参加者も多かったのですが、子どもの様子を伝えるときに、その子のもつよさを見取り、温かく対応することも必要となってきます。子どもの成長を見守りつつ、保護者との良好な関係を築くためのアフターケアも大事にしたいものです。

家読講演会「^{よしふみ}長谷川義史絵本ライブ」5/24 会場：羽後町美里音



大阪弁による軽快な語り口。スクリーンで大きく映し出される登場人物のコミカルな表情。講師の長谷川義史氏は、会場の子どもの心をつかんでいました。絵本「大阪うまいものうた」では、歌と手遊びを交えて大阪の自慢を伝え、その後会場の子どもたちとやりとりをしながら「秋田のうまいものうた」をつくっていく様子は、ライブ感満載です。(♪ 秋田さも うみやもの いっぴやあるんだど〜♪) 模造紙に墨で絵を描きながら読み進めたり、ウクレレ伴奏で歌付きの絵本を紹介したり等、絵本や作家本人との出会いは、子どもたちの読書に大きく影響をもたらすことでしょう。



「自分は1年生のときに父親を亡くしたが、命はつながっている。子どもたちが自由に暮らせる時代をつくることは大人の責任であり、子どもたちには好きなことを見つけてそれを続けてほしい。大人はそれができる自由で平和な時代をつくらなければならない。」と語る長谷川氏の言葉が、深く心に響きました。普通の暮らしや互いを思いやる優しい心が平和につながるという絵本に込めた思いを直接伺うことができ、平和の重要性を実感したひとときとなりました。

昨年度に引き続き、「あきたのそこちから！」の項目ごとに4人の社会教育アドバイザーがコラムを担当します。今回は「体験活動と読書」についてです。

た 体験させよう！遊びや読書が育む豊かな人間性

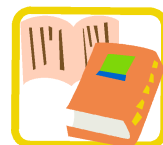
体験や読書による「気づき」や「学び」は、子どもの豊かな成長に欠かせません。家庭の外で、人や自然とふれあう遊びや体験活動は、新たな発見や感動を生むだけでなく、社会のルールやマナーを学ぶ絶好の機会でもあります。また、絵本の読み聞かせや家庭での読書活動は、家族間のコミュニケーションを深め、親子の絆を育みます。



★ 幼児期や学童期には、自然の中での体験や遊びが必要です。それは自然体験が子どもの生きる力につながっているからです。子どもは、五感を使って目の前の事象を捉えて学んでいきます。特に自然の中では本物の体験ができますし、疑似体験では味わうことのできない感動も味わうことができます。しかし最近では、自然にふれながら様々なことを体験している子どもが少なくなっており、こうした体験不足が小学校入学後の様々な学びに影響を及ぼすこともあります。「どうして？」や「なぜ？」という疑問を直に感じることができる体験は、子どもの知的好奇心を育み、こうした直接体験を重ねることは、豊かな人間性や社会性を育むことにもつながります。

各市町村では、放課後や休日に地域の特色を生かした体験活動を行っていますので、このような場も活用しながら、子どもの感性を豊かなものにしていきたいですね。

★ 子どもたちは、本との出会いを通して未知の世界を体験します。知らないことを知る喜び、そして読書で広がる空想の世界は、子どもの心の栄養となり、一人一人の生きる根っこを広げていきます。読書が好きな子どもを育てるためには、大人も本に親しまなければなりません。楽しそうに本を読んでいる大人がまわりになれば、子どもは自然に本の世界に引き込まれていきます。親子で本に親しみ、語り合う時間を増やしましょう。特に読み聞かせは、本の内容とともに、親子それぞれの心に大切な思い出として残っていきます。読書で子どもの健やかな心を育てていきましょう。



オーケストラがやってきた！

体育館に響く弦楽器の優しい音色。目の前で表情豊かに奏でている演奏者の姿。子どもたちの心は、本物の音の世界に引き込まれているようでした。

7月6日、大仙市立東大曲小学校を訪問したのは、京都フィルハーモニー室内合奏団の皆さんです。この訪問は、「文化芸術による子供の育成事業」として実施されました。



事前のワークショップを生かしたオーケストラとの共演や、趣向をこらした楽器紹介等、子どもたちは音楽との出会いを楽しんでいました。弦楽器体験コーナーでは、団員たちと交流するひとときもあり、プロならではの演出が光った演奏会でした。

金澤翔子^{しょうこ}席上揮毫 & 金澤泰子^{やすこ}講演会

翔子さんの手元を見つめる中学生の真剣なまなざし。一心に書に向かう芸術家の魂。力強く訴えかける「共に生きる」の書。7月3日、美郷町立美郷中学校において金澤翔子席上揮毫が行われました。「自分の知らない世界を知ることによって自分を広げてほしい。翔子さんの書を心で感じてほしい。」と挨拶された松田町長さんの言葉どおり、本物に触れた静寂の時間は、美郷中生や来場者の胸に深く刻まれました。



講演会では、翔子さんの母親である泰子さんが、ダウン症と診断された娘と二人三脚で過ごしてきた日々を語ってくださいました。書との出会いからひたむきに努力し、見事に開花した翔子さんの才能。娘を信じ、その成長を応援し続けてきた母親としての思い。「子どもの力を信じ、できたという達成感を味わわせること。闇の中にも光があり、苦しいときこそがチャンス。人にはそれぞれ生きる役目がある。娘の純粋な魂と優しさは宝物。」と語る泰子さんの言葉は、壮絶な日々を乗り越えてきた人だからこそ断言できるものなのでしょう。子育て真っ最中の方々に、機会を捉えて泰子さんの言葉を伝えていきたいと思いました。